

eye

ナリミソ作り。ソテツの実(ナリ)を割り、旧正月用のみそを作る。ソテツは戦前、戦後の食料難時代、島民の命を支えた救荒作物。人々は今も伝統の味を大切に守っている=徳之島



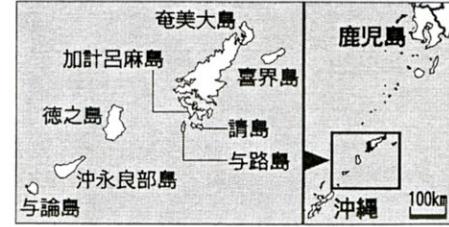
与論十五夜踊り。旧暦3、8、10月の15日に披露される国指定重要無形民俗文化財。本土風と琉球風の踊りがセットになっていて、琉球と薩摩の支配下に置かれた島の歴史を物語る—与論島

人見るもの
ないもの。過去、現在、
未来。すべてのものと
つながり合って自身は
存在するという生命の
有りようを一言で表現
した深い言葉である。
響いたマブライに向
かって私の旅は続く。



ハ月通り、男女が囁を掛け合ひ、転はなでて踊る。女性はチヂンと呼ばれる小太鼓を打つ。唄と踊りと樂器が一体となつた踊り——奄美大島

響いた言葉がある。



見えたもの。見えたもの。過去、現在、未来。すべてのものとながり合って自身は在するという生命のやりようを一言で表現した深い言葉である。響いたマブライに向つて私の旅は続く。

◆奄美群島◆ 鹿児島と沖縄の間に浮かぶ喜界島、奄美大島、加計呂麻島、与那島、請島、徳之島、沖永良部島、与論島の8島をいう。人口約11万8900人。由

から近世まで琉球と薩摩に計約600年支配されたため、琉球や中国、日本の文化が混在する。敗戦後は8年間、米軍下に置かれた。地図上の表記は奄美諸島

09年9月現在、100歳以上の長寿者人口10万人当たり115.54人で全国平均の約4倍。ギネスブックで長寿世界一された島重千代さん（120歳没）や本

者は かまとさん (116歳没) は徳之島で
平均 わ育った。

◆山中順子◆ 写真家。2000年から
この物差しに触れる旅を重ね、聖

生ま 旧暦の祭り、人、自然と神々が共にす日當などを握り続けている。昨年

「シテや」日常などを撮り続いている。叶年にフランス版GEOグラフィック「日本、奄美のシヤーフニズ！」ヒ

暮ら
年11月
誌に
して
掲載された写真を含む写真集「奄美100歳 母なるシマ、生命（いのち）の島」を出版（とんぼ社）。「奄美手帳」はサワーラーク型 <http://www.emmeme.jp>

響いた存在がある。
奄美群島。島々はシマ
(集落)で構成される。
シマは聖なる場所を持
ち、独自の文化を今に
伝える。島唄はシマ唄
であり、島料理はシマ
料理。奄美の島々の多
様で深い文化は、シマ
によって成り立つ。シ
マと島。「二つのしま」
に10年通っている。

者「生き神様」のなん
と多いこと。徳之島の
岩本吉満（当時 10
2）、キクさん（同92）
に会ったとき、夫妻は
縄文時代のころから存
在しているような頑丈
な骨格だった。「人生
は楽しい。ハハ。こ
れからもいいことがあ
りますように」と笑つ
ていた。

り立つ岩。海のかなたからシマに招かれる神の依り代である。人々は折につけ、タチガミを眺め、おもいを寄せ、対話してきた。立神という岩と人々の内面は常につながり合っていた。

心に響く奄美のマブライ



立神。シマ（集落）の沖にそびえ立つ岩。海のかなたから訪れる神の依り代であり、シマの人々の心のよりどころ。手前の木はティゴニ奄美大島